



1942



去の病くあし本かる山々温
 泉も愈^二招^一丹もあつり^二志
 を^二つ^一る^二ま^一ま^二か^一れ^二性^一に^二あ^一ら^二ん^一
 ち^二月^一と^二先^一の^二こ^一も^二野^一を^二あ^一
 へ^二春^一より^二花^一は^二つ^一れ^二あ^一
 ち^二あ^一ゆ^二り^一と^二曙^一の^二あ^一ら^二に^一
 ち^二あ^一奴^二ろ^一十^二と^一り^二あ^一ら^二ん^一
 け^二ら^一う^二丹^一や^二あ^一ら^二ん^一



うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ
かたしへさすまはらるるかたしへ
泉ははすまはらるるかたしへ
かたしへ

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

岩根より鱗あり走鮎其角

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

傍より薬師堂あり朝々暮々

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

尖をさし一丈余の十如院

うき世にまはるるかたしへさすまはら
るのさかたにまはるる文鱗のさか
たのさかたにまはるるかたしへ

多きく百人のまのむに 祇長基佐
の作をぬきくしり 世に大あ三、
吟上云 我の三
人があやう 温かにならすして
そましまれけらんかきま

其一

志くも早苗よりなる寺れ門 其角
一のぶあうう ミヤガ 鳥尾の下 文鱗
宗長の ミヤガ 出雲の月夜 枳風

其二

涼の寝をまぬるの早き光ハ 枳風
水札の程きまをうすふあ 其角
栄人よまぬ宗祇何なり 文鱗

其三

菅草浦あつしなとぬき スガ 文鱗
驛の致遣 ムヤ 枳菜 ムヤ 枳風
枳井の枳 ムヤ 枳風 其角

身口意の三業法報應乃三如来
おとろくに帰すもわづらもと醫王堂

前より奉掛 于時貞享二年
五月日

五月雨を比の字の雨日敷か 文鱗
まゐるや湯の樋お山に寝たり 其角
比らたつてまてらつた野あかりを
あそびやちやうし くらうらるる
こまにたもるる 雲よりみゆる那

のらたの囀れをい 猿の
鳥すへくありけはり 奇石怪松
ふやまゝし母あはれ

奥や滝平に流るる谷の壺

宗祇がうそとやをいけは我は芭蕉翁の

山路まで何やゆ 草押

千載集
こまにたもるる 雲よりみゆる那
おれなうらうらるる 雲よりみゆる那

菴三、蚊連をまらぬたの文鱗

蜘蛛く芥のむかへ標哉 枳風

うきうきと風をいせむしうき

うきうきと鼻きとくさくらわきり

よ容ありけりやをもてたよ

名正の海をたすして鯉の其角

照射みだ念仏のよの傍り 枳風

^{実情集} 秋の柳に書こも鹿をいふや

秋のきつ竹やうも 鎌倉を隠

士来塚にうもまへく成るわび

うきうきとあつたのいりつら

ありて其句らりつらとくた

経母をいつとあわり

木笑入湯のはあつた

九秋はくもあつた

うきうき

ふうふうもきふふふふ酒行さら
夜もあまてなつらひるれ

浴^ニりまつておろりぬおろり
とく強^クなるといふく招風^ニり
りおわしとく岸^ノの湯^ニあり
こゝちる傳^ニり泊^リてあはれ
のほに詣^テけり所思

墨^ノ海^ニの浦^ノの鯉^ノも養^ハれ文^ノ鱗

微^ニ雨^ノの山^ノ屋^ノ頭^ノ一曲^ヲかへ其^ノ角

はなれ橋^ヲ越^シて通^リりけりて海^ニ

かゝるる

篠^ノ子^ノと慰^ニむるも其^ノ角

新^ニ長^ノ谷^ノ寺^ニに詣^テ

まの帆^ノ片^ノ帆^ノきく嵐^ノに渡^リり文^ノ鱗

海^ノのやまの酒^ノのたしむる

とく強^クなるといふく招風^ニり

かゝるものありては

しつゝ甲斐の長男は

あつてはたゞ

あつてはたゞ

志づりける 其のまの 文鱗

幌がく 一とれ ねん長瀬 其角

かゝるものありては

すゝめしきとて

いつら或曰無詩俗了人と

其角 我の俗に 其角

文鱗 名をいふ 文鱗

圓光に入用山佛光禪師を

るに

生かす

鳥肩も

はく

ちのちにははるばるのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまの
と曲に寒山う笑をまげぬ和
尚のうたはたをせんうらやまの
うらやまのうらやまのうらやまの

漢花にけは黄泉の棘ヒツカ 自悦ヨク

草一花をまかすはくうらやまの志
うらやまのうらやまのうらやまの尾
陽独白よまをて体う言ある人
うらやまのうらやまのうらやまの尚
うらやまのうらやまのうらやまの
遷化—うらやまのうらやまのうらやま
うらやまのうらやまのうらやまの

附尾

季下

正宮御を駒子代り留りてしるひ也

かきりよすむらしりきり陽虫と文鱗

舟獲て野渡も物も遊びん其角

毎朝昔月夜やちれははる蚊足

月やゆるつたかき鱗とねまはる

こゝろ離れつ鱗からゆふ下

春の由揚屋に志をうつし足

かみこあまのよまのつらく角

大將を去卒も仰目の人命下

昔り江ぬく埋し肩衝鱗

津島や水の阿比と淡路島角

踏ふこはらに流るるハカ足

とる人負もそけいの曾我の氣は味鱗

田中へきかたぬ下りるるあり下

月よおしく秋を時の移る先なる
こぼるる雨多宮司軒を絶
よりの端終の乞食を怨ん
身延やうそ母の初ういなり
舞一衣まき川時を室初うい
雨の林まら樹把おにゆ
川やよりのまら和島れ土車
そまらるる今の山城入るる
下 鱗 足 角 下 角 足

鍛冶の楯片肌めまら鳥棚の
おらうりて先よ今と枕の寄
おつちよまらるの痛水にまられす
うらうらうらめ櫻をひらふたも
ふ席のまらまら酒屋にまられ
三人の侍まら身をまられ
男のまら八句をのこしげ
齡まらまら城よ杖はく
下 鱗 足 角 下 角 足

之れをさりしは夜をあらと云れて
 涼とありしよと氷のよと
 観るは厚にあり鶴のよと也
 等しく太麻のちすのやれさよ
 くれ虚瓢 キヨ ヒヨ たのさすま かをりて
 宗祇宗長 柳さくららぬ
 足 角 鱗 下 角 足

書林 京堀川通錦小路七町
 西村市郎右衛門藏版

芭蕉翁門徒書目録

みどり之里	其角輯	二冊	丙寅記	凡瀑集	一冊
續みどり之里	日輯	二冊	新の家	其角輯	一冊
花法見	日輯	二冊	獲花法見	湖十輯	二冊
楚衣袋	嵐雲輯	二冊	たま乃日	越人	一冊
蛙おの姿	芭蕉其角 素堂仙化輯	一冊	柿 蒔	宗瑞 咫尺	一冊
新二百歌	其角輯	一冊	長樂寺千句	大石	一冊
皮袋招	凉危輯	二冊	千載堂百首仙集	大石	五冊
挑諧小傘	初心仕候 調宝殿々象集記	一冊	俳諧書後目録		三冊

